

# 校 内 研 究

## 1 研究主題

### 「主体的・対話的で深い学び」の授業の創造

～学び合い・深め合う授業づくりを通して～

## 2 主題設定の理由

「社会に開かれた教育課程」のスローガンのもと、中央教育審議会の答申を受け、平成 29 年 3 月公示の新学習指導要領が改定された。これからの社会においては、身の回りに生じる様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力をもった人材が求められている。こうした新しい社会で活躍できる人材の育成に向けては、「何ができるようになるか」が重要であり、そのために「何を学ぶか」に加えて、「どのように学ぶか」が今まで以上に大切になってくる。学校や社会が資質・能力を共有し、連携して、一人一人の子どもの学びを確かにすることが期待されている。第 1 章総則において、「学校の教育活動を進めるにあたり『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善』を通して創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で児童に生きる力を育むこと」を目指すものとある。

本校では「学びの共同体」の理念・理論をもとに研修を重ね日々の授業に取り組んできた。その結果、児童が「学び合い」を意識して学習に臨むように育ちつつある。また、小規模校の特性を生かした授業改善や集合学習・交流学习・合同学習や個に応じた指導やはげみ学習等で生きる力（学力向上）を育んできた。しかし、わからない問題に対し浅い考えや、困難な問題に対して諦めたり、粘りが無い子もいる。我々教師が「達成感のある授業」をいかに仕組むかが、今、求められている。

そこで、日々の授業で「なぜ？」「知りたい」「分かりたい」などの主体的で協同的解決に向かうような課題設定の工夫、見通しを持たず、学び合う場面の設定、振り返り等の授業デザインをイメージ・実践することで、児童一人一人の課題解決に向かう力や、対話を中心とした探求的態度を育むことが重要と考える。授業終末における“振り返り”による自己変容を自覚する場面を大事にしたい。各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる授業を仕組むことで、児童一人ひとりの“学び”に広がりや深まりが促進されることが涵養と考える。昨年につき「学びの共同体」の理論による授業実践を重ね『主体的・対話的で深い学び』の授業の創造をめざし、本主題を設定した。

## 3 研究仮説

児童一人一人の「問い」を起点に、課題設定の工夫、対話（学び合う）場面の設定、振り返り等、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる授業を創意工夫すれば“深い学びのある授業”に迫ることができるであろう。

## 4 研究の方針

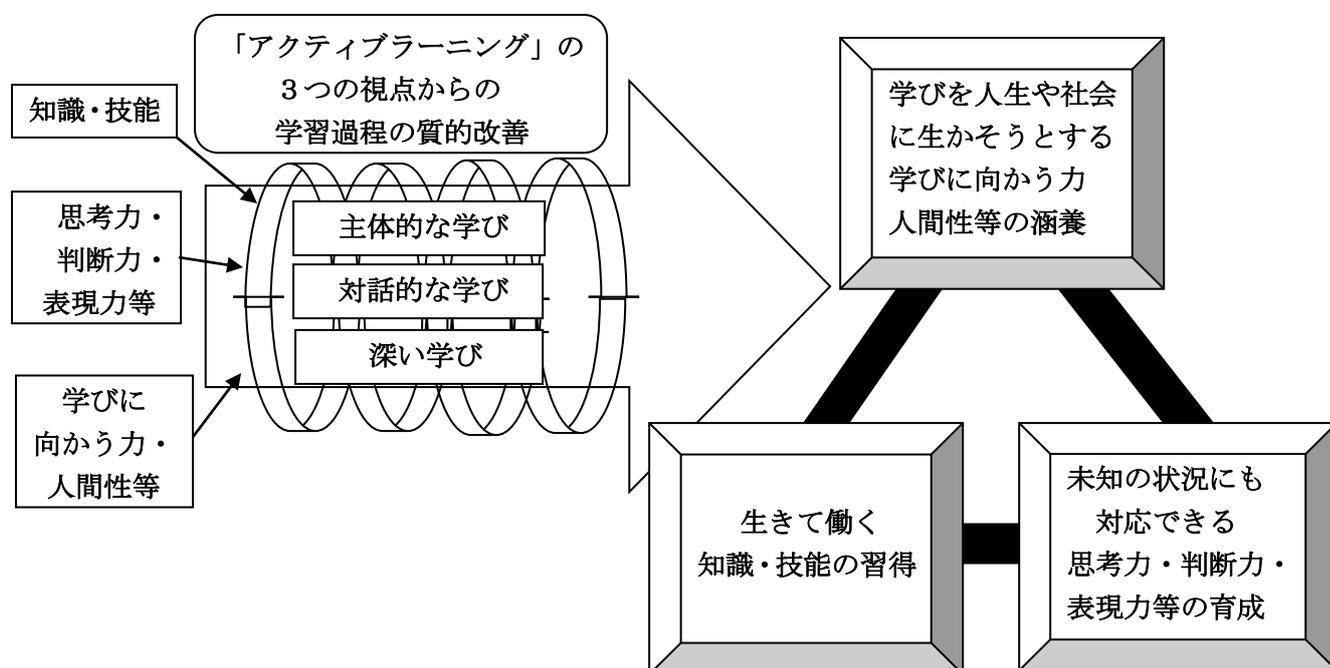
- (1) 学校教育目標の具現化のため、校内研修と学力向上推進を一体的に捉え、組織的・計画的に研究活動を推進する。
- (2) 全職員の共通理解のもとに研究を進める。

- (3) 学校・学級・児童の実態に対応して理論研究及び授業実践を重ね、子どもの可能性を拓く授業を追究していく。
- (4) 「学びの共同体」を推進するため、村教育委員会の指導主事を招聘しての授業研究会を持つ。
- (5) 校内研修日は原則として毎月第四火曜日とする。授業研究日は原則日に限らない。
- (6) 同僚性と授業の質を高めるために、授業参観者は、必ずアドバイスや授業における参観者の気づきを話すようにする。
- (7) 研究授業は、国頭教育事務所の指定の指導案形式を使い、一人一授業を実施する。
- (8) 日頃の研究授業は、村教育委員会指定の授業デザインシートを活用し、実践する。
- (9) 校内研修は研究テーマ設定による研修、及び教育課題に対する職員の見識を高める研修を実施する。
- (10) 各学年・学級に応じた手立てを考え、「学び合う」授業づくりを研究する。
- (11) 研究授業の2週間前位には、全員で指導案検討会を持ち、助言やアドバイスを行う。
- (12) 学級の実態から「個人テーマ」を設定し、視点を明確にして授業力向上を図る。

## 5 研究の方向性

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、学習過程を質的に高めることが必要であり、そのための授業改善が、「答申」において次のように求められている。

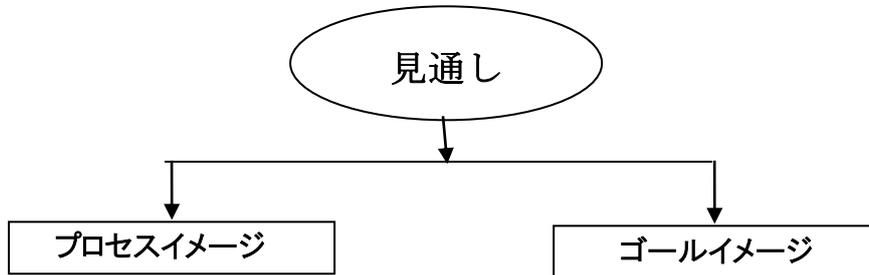
- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けて深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。



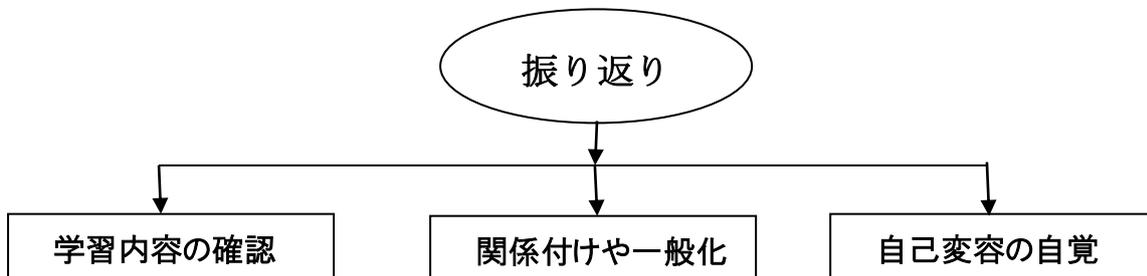
## (1) 「主体的な学び」を実現する

①授業の導入における「課題設定」と「見通し」、終末における「振り返り」を意識する。

- ・リアリティのあるクオリティの高い「課題設定」によって、課題を解決していくプロセス自体が、学習者にとって充実したものとなることが欠かせない。
- ・学習活動の「見通し」を明らかにする。見通しには、大きく分けて二つある。  
一つは、解決に向けて進めていくプロセスイメージを明らかにすること。  
二つは、学習活動のゴールイメージを鮮明に描くことである。



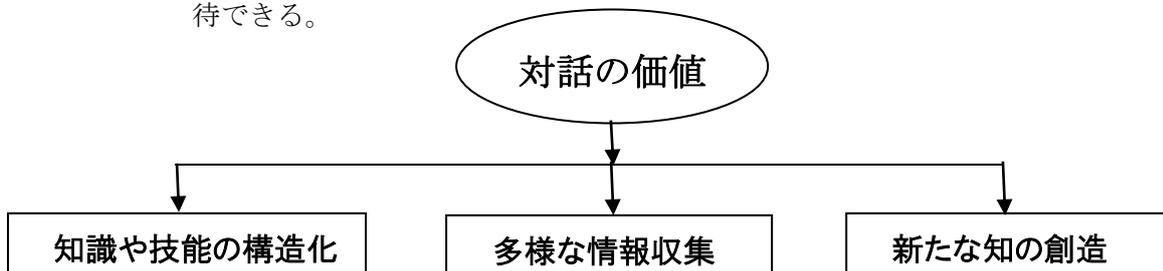
- ・「振り返り」は、自らの学びを意味付けたり、価値付けたりして自覚し、他者と共有して行くことにつながる。振り返りの場面には、三つの意味がある。  
一つは、学習内容を確認する振り返り。  
二つは、学習内容を現在や過去の学習内容と関係付けたり、一般化したりする振り返り。  
三つは、学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する振り返り。



## (2) 「対話的な学び」を実現する

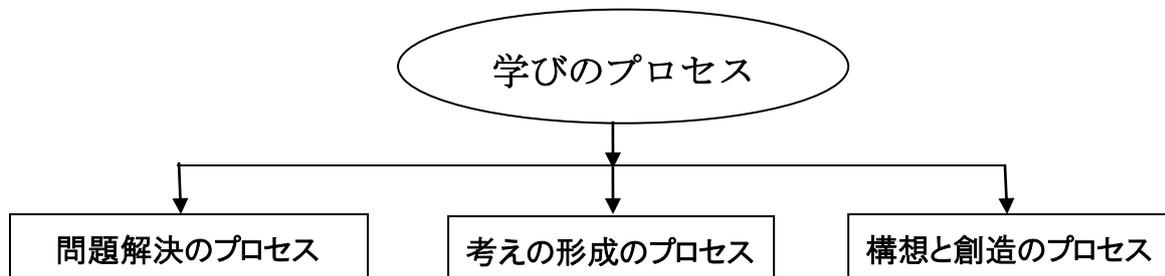
①異なる多様な他者との学び合いを重視することが大切になる。

- ・学習のプロセスを質的に高めて行くとともに、他者と力を会わせた問題の解決や協働による新たなアイデアの創造が求められているからである。
- ・このような多様な他者との対話には、次の三つの価値が考えられる。  
一つは、他者への説明による情報としての知識や技能の構造化。子供は身につけた知識や技能を使って相手に説明することで、つながりのある構造化された知識や情報へと変容させていく。  
二つは、他者からの多様な情報収集。多様な情報が他者から供給されることで、構造化は、一層質的に高まるものと考えられる。  
三つは、他者と共に新たな知を創造する場を生み出すとともに、課題解決に向けた行動化も期待できる。



### (3) 「深い学び」を実現する

- ① 「深い学び」については、これまで以上に学びのプロセスを意識することが求められる。
- ② **問題を解決するプロセス、解釈し考えを形成するプロセス、構想し創造するプロセスなど、教科等固有のプロセスが一層充実するようにしたい。**
  - ・「深い学び」の実現のためには、身につけた知識や技能を活用したり、発揮したりして関係付けることが大切になる。だからこそ、明確な課題意識をもった主体的で文脈的な学びで知識や技能のつながりを生むことが必要であり、情報としての知識や技能を対話によってつないで再構成する**処理場面の活性化**なども重要となる。
  - ・また、学習活動を振り返り、体験したことと収集した情報や既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理し意味付けたり、それを自覚したり共有したりすることも大切になる。



### (4) 「深い学び」と「見方・考え方」

- ① 「見方・考え方」は、**教科の本質、その中核**である。その教科の存在意義や価値を示すことのできる学びの有様を「見方・考え方」と考えていく。別の言い方をすれば、「見方・考え方」は、各教科等の特質に基づいて対象を捉え、認識したり、働きかけたりする、**教科等に固有の学びの有り様**と考えることができる。
  - **見方** : どのように対象を捉えるか  
(教科等固有の対象を捉える視点)
  - 考え方** : どのように対象と関わり、対象に迫るか  
(教科等固有のアプローチの仕方、プロセス)

※参照書籍：「深い学び」より・・・東洋館出版社 著者：田村 学 氏

### (5) 各教科等における「考えるための技法」(小学校学習指導要領 解説より)

- ① **順序付ける** (複数の対象について、ある視点や条件に添って対象を並び替える)
- ② **比較する** (複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする)
- ③ **分類する** (複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる)
- ④ **関連付ける** (複数の対象がどのような関係にあるか見付ける)  
(ある対象に関係するものを見付けて増やしていく)
- ⑤ **多面的に見る・多角的に見る**  
(対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする)
- ⑥ **理由付ける** (対象の理由や原因・根拠を見付けたり予想したりする)
- ⑦ **見通す** (見通しを立てる。物事の結果を予想する)
- ⑧ **具体化する** (個別化する、分解する)
  - ・(対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする)
- ⑨ **抽象化する** (一般化する、統合する)
  - ・対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。
- ⑩ **構造化する** (考えを構造的【網構造・層構造】に整理する)

## 6 研究の内容

### (1) 「学びの共同体」についての理論研究

- ①心がける・・・授業デザインへ向けての心構え
- ②気にかける・・・授業中に子どもたちの様子を見る視点

	① 心がける	② 気にかける(見取る)
主体的学びの成立のために	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎子どもの「なぜ?」「どうして?」などの子どもの「問い」を大切にする。</li> <li>◎深い学びにつながる発問の工夫。</li> <li>◎自分で解決に向かったり、仲間と一緒に考えたりする時間の設定。</li> <li>◎子どもが挑戦したくなるような問題の工夫。</li> <li>◎教師や仲間の発言の後に、しっかり考える間を与える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→他者の発言やテキストから自分なりの「問い」や考えが持てているか?</li> <li>→課題やテーマとのつながり。</li> <li>→困難な課題に向かう意思を持って臨んでいるか。</li> <li>→夢中になって解決に向かっているか。</li> <li>→子どもの「問いや疑問」に教師がすぐに反応しないで仲間につなぐ。</li> </ul>
対話的学びの成立のために	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎子どもが互いの考えや意見を「きき合い」自分の考えを吟味する、対話による学び合いの時間の設定。⇒(グループ、ペア)</li> <li>◎子どもの表情やしぐさ、つぶやきを見取るようにする。(子どもの困り感に寄り添う)</li> <li>◎課題や問題に対して仲間と吟味し、自分なりの見方や考え方の深まりや広がりを持たせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→グループやペアで「きき合い」が成立しているか? 「言い合い」になっていないか?</li> <li>→対話に消極的な子どもは、意図的に教師が仲間につなぐ。</li> <li>→「分からない」こと、「分かりたい」ことなどの対話の質を見取る。</li> </ul>
深い学びの成立のために	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎授業の終末に意識を向け、丁寧な授業の「振り返り」を行う。</li> <li>・文章に書いて振り返る</li> <li>・ペア・グループの「学び合い」と作文による「振り返り」をつないで、学びを深める</li> <li>◎本時のねらいと照らし合わせる</li> <li>◎余韻が感じられる終末を用意する。</li> <li><b>充実感</b> すがすがしさ、気持ちよかった等</li> <li><b>達成感</b> 「できた・できそだ」の実感</li> <li><b>自己有能感</b> 自分自身の成長の実感</li> <li><b>一体感</b> 協同的に学び合うよさや楽しさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→「振り返り」の三つの視点につなげる</li> <li>・学習内容の確認</li> <li>・関係付けや一般化</li> <li>・自己変容の自覚</li> <li>→その日の授業が目指すねらいに対して、目の前の子供の姿はどのような状況なのか、照らし合わせたら、即座に判断する。</li> <li>→「深い学び」の子供の姿を、具体的に語る(見取る力)ことが重要となる。</li> <li>・評価規準をもつ</li> <li>・時間軸で子供の姿をつなぐ</li> <li>・空間軸で子供の姿をつなぐ</li> </ul>

### ③教師と子どもの関係、子どもと子どもの関係

- 「分からないこと」を依存できているか?
- 依存されたら、寄り添って対応しているか?

④教師の指導技術・・・教師の学習指導を「発信」から「受信」に変える

- 発問・・・課題への誘い、思考するきっかけ、等
- 「学び合い」への『聴く』・『つなぎ』・『もどす』

その1『聴く』

- 発言やつぶやきが何を根拠に発せられたか
- テキストの資料のどこにつながって発せられたか
- 以前の考えや発言とどうつながって発せられたか

その2『つなぎ』

- 学級の仲間とつなぐ  
つぶやき、発言につなぐ
- テキストや資料とつなぐ
- 社会の事象や過去、未来とつなぐ

その3『もどす』

- 子どもがつまづいているとき
- ・テキスト、資料にもどす
- ・課題にもどす
- ・グループにもどす
- ・全体にもどす

ケアする

子どもの目、仕草、顔の表情や身体の動きから子どもの困り感やつまらなさ等を感じたら子どもの傍らでケアする。  
教師によるケア・子ども同士によるケアの配慮

⑤課題設定のレベル、授業デザイン（流れ）、学びの質

- 課題は、学びの質、思考を深めるレベルになっているか？
- 授業のデザインに無駄や偏りはなかったか？

(2) 安田小学校 「学びのスタンダード」

「課題設定」「見通し」「対話」「振り返り」の場面を取り入れた授業の工夫

① 本時の課題提示 □→ 基本的な問題や課題【プロセスとゴールのノイメージを】

- 1回目のグループ活動：基本的なことをグループ内で共有する場面  
：全体の底上げを図る場面

○まずは個人でトライ □→いきづまったら □→個人作業の協同化へ  
つまづいた子をきっかけに学び合いが必然に発生するようにしたい

○教師は、子どもと子どもの互いの学び合いをうながす。

▲教師が出過ぎない（子どもの動きを見守る机間支援）

②全体でのすり合わせ I

全体で意見や考えをすり合わせる場面

- グループ内ででた学びを全体で共有する
- 全体の息づかいをあわせる（他のグループ内の考えとつなぐ）

▲教師は、個の意見や考えを「聴く」こと「つなぐ」ことに気を配る

③ 2回目の課題提示 □→ ジャンプ問題（簡単には解けない問題）

- 2回目のグループ活動：高い課題に挑戦する場面（できそうでできない）  
：レベルの高い上位層に合わせた問題や課題

○どれだけのレベルまで上げるか？教師の見取りがカギになる。

▲課題が簡単だとつまらなさを感じる。

▲学び合いが滞っていないか、グループと個人へのケアへ気を配る

④ 全体でのすり合わせ II ※振り返り場面を設定する

多様な考えをみんなで認めあい共感を図り、児童の「自己有能感」や「学びの達成感」を共有したい。（次へのつなぎ）○授業の反省や感想はできるだけ明日へのつなぎを考えさせ、さりげなく終わる

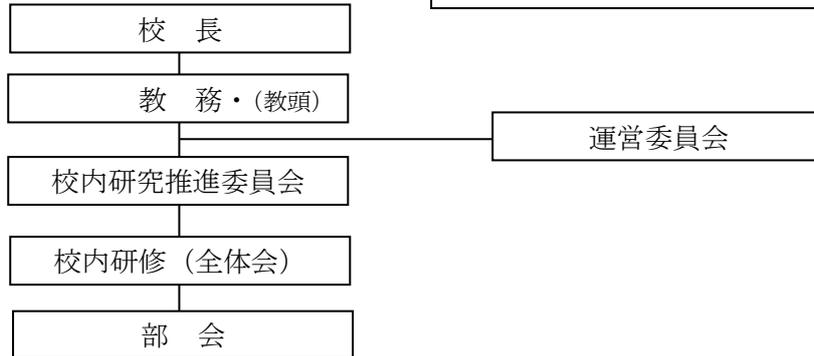
(3) 指導と評価の一体化を図る授業の工夫

- 主事招聘による公開授業
- 学期一回の互見授業

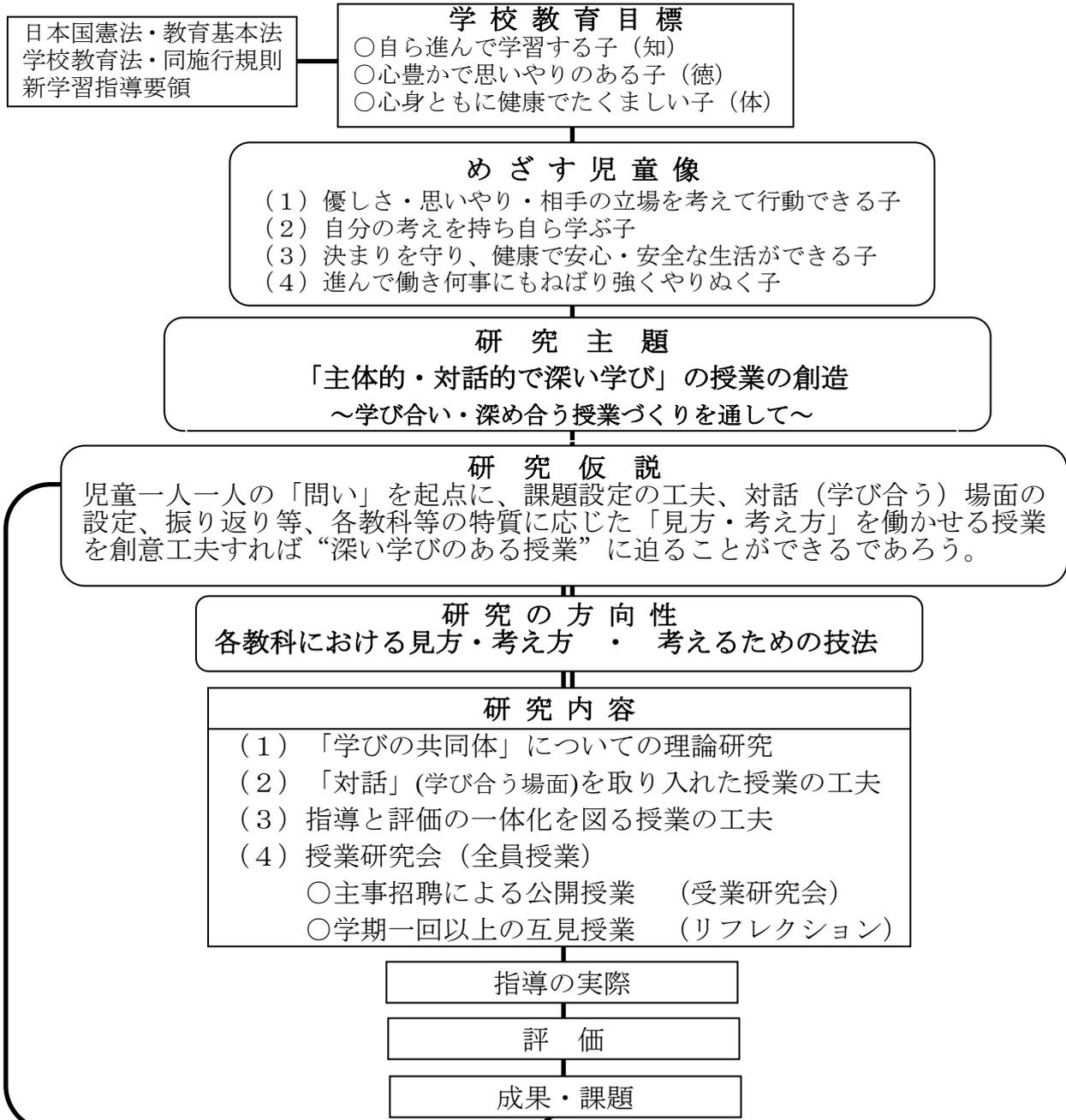
授業研究・協議会のポイント

- ① 子どもの「学び」を見取る力  
(授業者・参観者等による省察)
- ② 固有名詞と事実で語る
- ③ 代案を語る
- ④ ワークショップ型 等

## 6 研究組織



## 7 研究構想図



## 8 研究年間計画

月	日	曜	研究及び研修内容	要請指導主事及び講師
4	3	水	① 校内研テーマ・内容・年間計画の確認	研究主任
	4	木	村内新任赴任教職員研修会「学びの共同体」	
	23	火	② 校内研 サービス・人権ガイドブック	研究主任
5	17	金	村へき地研修会・奥小学校	
	20	月	③ 校内研 出前講座・特別支援教育	県総合教育センター
	27	月	④ 指導案検討会（担任会）	
	28	火	村内研修会（道徳・特支）	
6	18	火	⑤ 校内授業研究会（3年）国語	主事招聘
	27	木	村内研修会（第1回交流学习）	辺土名小学校
7	24	水	⑥校内研（全国学力学習状況調査の分析）	
8	22	木	⑦夏休み校内研 いじめ問題 生徒指導	伝達研修
	23	金	⑧夏休み校内研 出前講座・プログラミング学習	県総合教育センター
9	18	水	⑨指導案検討会	
	27	金	村内研修会（第2回交流学习）	奥間小学校
10	1	火	⑩校内授業研究会（4・6年）道徳	主事招聘
11	19	火	⑪指導案検討会	
12	3	火	⑫校内授業研究会（4・6年）算数	主事招聘
	9日(月)～17日(火) 校内研修の成果と課題についての回答期間			
	24	火	⑬校内研修の成果と課題についてのまとめ 研究集録作成について	
12/25日(水)～1/20日(月) 研究集録用資料作成期間				
1	21	火	⑭研究集録原稿提出〆切り	
1/22日(水)～2/17日(月) 研究集録印刷・製本				
2	18	火	⑮校内研 研究集録を確認及び反省	
3	6	金	⑯校内研 次年度の校内研修について	

※授業者の中で一人は、道徳を受け持つ。授業研究会（指導助言等）の中で道徳についての研修を深める。

※特別支援学級と2・3年は、T・Tで授業をする。

※主事要請授業研究会は基本的に2回、しかし5年研（各教科1回と道徳又は特活を6月～12月の間で実施）・中堅教諭資質向上研修者を優先する。

※互見授業による、教師が学び合う機会を持つ。省察によるリフレクションでの見取る力の向上を図る。各教師とも学期に1回以上行う。